

2019 年度 第 13 回講演会 記録

日 時	2019 年 10 月 26 日 13:00~16:00	
会 場	此花会館 梅香殿	
講 師	京都大学名誉教授 田中 克先生	
演 題	2019 年度講座前半から後半へ “間” と “原点” を考える	
備 考	参加者 135 名 (聴講 4 名含む)	記録：高城光一

本日は東大名誉教授・人類学者尾本恵市先生による演題「縄文人と弥生人：新たな人類学的視点から」が予定されていたがご都合によりお出で頂けなくなったので、急遽田中先生が上記演題で代役を務めることになった。尾本先生のご都合が許せば来年 2 月 22 日・最終講演日に講演頂くことをお願いしている。尾本先生の研究内容についても若干紹介するとの前置きの後、以下の内容で講演された。(高城)

【講演要旨】

1. 「原点」を探る意義

今年度のテーマに「確かな未来の原点を探る」を掲げた理由は「確かな未来」が見えないからである。現在地球環境には深刻極まりない問題点が山積していることを指摘はできるが、現状を変える方策を見出せないジレンマがある。方策を見出すためには一度原点に立ち返る必要があると考え、1 年間このテーマで講座を進めることにした。

6 月にはすべての生命や力の根源としての太陽について黒河先生、7 月には変動する地球の現状について尾池先生、9 月には生命の起源について高井先生、10 月には海から陸に上がった人類の進化について西田先生に講演いただいた。本日は尾本先生に狩猟採集民としての縄文人と農耕に生きる弥生人について講演していただく予定であった。次週は谷口先生が人類の未来は過去にあることについて講演される。谷口先生は太平洋セメントに勤務され、世界各地の鉱山での採掘の現場に関わってきたが、鉱山をめぐるとてもない事態が起こっていること、また、過剰消費文明を脱却し持続可能性のある社会を目指して“懐かしい未来”についてお話いただく。

(1) 自己規制する文明は可能か？ シンポジウム

昨年 5 月、東京で「自己規制する文明は可能か」のテーマで文明のありようを考えるシンポジウムが開催された。お金が幸せの尺度となっている物質文明が行き詰まっていることを誰しも感じながら止められない。それを止めるには文明そのものを変えなければどうにもならない。そんな問題意識から産・官・学の知識人を招きシンポジウムが開催された。このシンポジウムで産から資源・環境ジャーナリストの谷口正次さん(主催者)、官から経産省審議官の前田泰宏さん、学から人類学者の尾本恵市先生が講演された。谷口先生は、自身は単なるジャーナリストではなく、環境破壊は常に資源開発と裏表の関係にあることから、資源・環境ジャーナリストを標榜し活動されている。前田さんは政府を支える立場にあるがイノベーションだけでは人類は幸せになれないとして安倍政権の政策を批判されている。同期の中井徳太郎さんとともに高級官僚の中にもこのような人がいるのは頼もしい。

人類学者の尾本恵一先生は人類の進化を研究されており、人類は文明を規制し、誤っていれば作り変えられるような進化をしなければ地球はもたない、そのような思いで研究されている。3 名の先生の講演が終わり、フロアーとのやりとりがある中で、当然のことながら先生たちの問題提起のほかに、「どうすれば文明を変えてまともな時代が開けるか？」との質問があり、尾本先生は「一度原点に戻ってみましょう」と答えられた。人間が生きていくには食が絶対に必要であるが、そのためには狩猟採集民族、いわゆる先住民の暮らしや文化を見直そうではないかと。

(2) 尾本恵市先生の研究

尾本先生（右写真）は分子人類学者で、総合人間学会のメンバーとしてDNAから人権をも視野に入れた幅広い研究をされている。専門の人類学ではアイヌ人やフィリピンのネグリティ人の起源に関する研究で世界的な成果を挙げられた。



1) アイヌの研究

DNA分析技術が未熟な時代、アイヌは欧米ルーツの民族であり、日本の先住民として認められない、あるいは認めたくない時代が続いた。その説を覆すために多くの民族の血液型（遺伝系タンパク質）を丹念に分析することによって、アイヌは日本の先住民であることを立証された（本州の日本人に最も近いのは中国人、次いで近いのはアイヌ人）。先住民としてのアイヌの暮らしや文化を守ることに尽力し、1990年以降国際的にも先住民を守る流れが生まれ、日本では2008年にアイヌが先住民であることが国会で決議された。2020年にはアイヌ民族博物館が白老町に建設される計画である。

2) ネグリティ人の研究

もう一つの先住民研究の対象は東南アジア（インドネシアやフィリピンなど）に住む小柄な先住民族ネグリティ人である。これら先住民の研究を通じて狩猟採集民には12の特徴があることがわかった。

- ① 150人程度の小集団生活をしている。150人は相互に認識しあえるサイズである
- ② きわめて低い人口密度（1%以下） ③ 主食はない（多様な食物） ④ 食物を保存しない。
- ⑤ ある程度の保存（温帯地方）、植物栽培（園耕） ⑥ 食物や道具の徹底的分配
- ⑦ 全員で食事をする（共食） ⑧ 男女の役割分担（男：狩猟、女：育児・採集）
- ⑨ リーダーはいるが階級はない ⑩ アニミズム（精霊信仰）⇒ 自然への畏敬の念
- ⑪ 正確な自然の認識（自然現象や動植物の知識）
- ⑫ 豊かな食糧獲得者は農耕民に類似（例：縄文農耕）

3) 先住民をめぐる深刻な問題と2014年の宣言

世界中の通信手段となったスマホには多くのレアメタルが使われているが、そのレアメタルの争奪戦が激烈に進行しており、その陰で原住民が深刻な状況に置かれている。2017年1月20日、フィリピンの大規模開発等の現場で、自分たちの土地の権利を生命をかけて守ってきた先住民族や農民のリーダー（ママヌワのリーダー ニコ・デラメンテ 27才）が殺害された。ほか各地でも殺人を含む深刻な人権問題が生じている。それにも増して深刻なのはスマホ利用者がその裏に隠された真実を知らないことである。こうした現状を踏まえて2014年にインドネシアの先住民を守る宣言が示された。そこには先祖から受け継いできた土地を鉱山会社に安く売ってしまったことへの悔いと共に、穏やかでやさしい民族が暴動を辞さない狂暴な民族に変えられてしまったことへの怒りが述べられていた。

そして、文明化した人類の8つの大罪を指摘した。

- ① 人口過剰（78億→100億へ。社会的接触過多から攻撃性が高まる）
- ② 自然破壊（資源の枯渇および自然に対する畏敬の念の喪失）
- ③ 競争の激化（国家はあたかも異なる生物種のように殺し合う）
- ④ 感性・情熱の萎縮（科学技術の過大な進歩による虚弱化）
- ⑤ 遺伝的衰弱（自然淘汰の消滅による）
- ⑥ 伝統の破壊（急激な価値判断の変化によって世代間の対立）
- ⑦ 教化（教育・マスコミによる画一化の懸念）
- ⑧ 軍拡と核兵器（言わずもがな）

2. 「間」についての考察

2003年に誕生した森里海連環学は 森と里と海という自然の繋がりを見直す学問と見られているが、それは表面的な見方であって、本来は「間」を考える学問である。森と海の「間」即ち里 特に巨大な里を考える学問であり、更に考えを進めると、都市に住む人々の価値観や環境意識を問題にする学問である。

現在は「間」が悪さをしている。住民の暮らしや意識がまともにならない限り地球環境は守れない。森里海連環学は人と人、人と自然、自然と自然 それらの「間」を問う学問である。科学は2つの特徴をもつ。1つは科学の本流として放っておいても専門細分化してゆく性格。もう一つはいろいろな知見を全体として繋ぎ合わせ俯瞰する性格である。細分化された分野ばかりをいくら進化させても地球環境問題は解決できない。細分化された分野をつなぎ直すこの学問は登山のような学問である。汗水たらして登山し、頂上ではじめて360度を見渡すような総合的な学問である。科学的知見を繋ぎ合わせ、社会や自然を再生する流れを作ってゆくものである。従って この学問は研究者のみならず幅広い理解者との協同が必要である。

最近思うことは、森里海連環学は森里海がうまくつながって機能しておれば必要とされない学問である。森里海がつむぎ直されれば、必要がなくなる。自分を消滅させるために汗水流す不思議な学問と思えてきた。

3. 重点テーマ

人生の最終コーナーを回って直線に入った自分としては、残された時間を有明海再生の取り組みを中心に、もうすぐ10年を迎える東日本大震災の記録をまとめることに絞ってやって行きたいと考えている。

(1) 有明海の問題に道筋を

有明海問題には政治、経済、司法などの矛盾が集約されている。この問題に正面から向き合うことなしには森里海連環学の存在価値はないと言える。有明海は周囲を火山で囲まれているため、河口付近には常に火山性の微細な粒子が貯まり、干潟域が自然に広がり古くより自然干拓が進められてきた。かつては限りなく生物生産性と生物多様性の豊かな“宝の海”であった。ところが、国は巨大公共事業として1997年に7 kmに及ぶ巨大な潮受け堤防を造成し、一挙に広大な干潟を埋める複式干拓を行なった。(諫早湾の潮受け堤防を挟み、有明海と調整池の写真(下))を示し、)

調整池と有明海の水の色が全く違う。調整池は淡水化して農業用水として使う予定であったが、その水質基準値を達成できないまま使えない状態が続いている。加えて、水の循環を止めたため赤潮が発生し、発がん物質を含むまでに汚染されてしまった。漁師は、潮受け堤防が水害対策上必要という意見に配慮しながらも、「満潮時にはせめて20 cmでも開けて海水を入れれば池の水はきれいになる」と要望するが、国と長崎県は「開門絶対反対」として全く聞き入れない。ところが、実際には調整池の水位が上がってくると「開門」して池の水を海に流している。発がん性物質を含んだ赤潮汚染水を大量に一気に流すわけだから漁業被害がでるのは当たり前である。



漁民の開門訴訟に対して福岡高裁は「開門請求権は漁業権の消滅に伴い消滅した」という論理で退けている。当たりのことが裁判で解決できないという理不尽を何とかしたいと願っている。

(2) 東日本大震災から学ぶこと

東日本大震災は自然への畏敬の念を取り戻すこと、大量生産・大量消費の物質文明に未来はないこと、自然を技術で征服することは不可であることなど多くの教訓を残したが、具体的な形で震災から学ぶことを取りまとめたい。

1) 住民の意見を反映した震災復興

舞根湾では 15m の津波によって沿岸の宅地や農地の大半が失われた。それらの湾奥部は元は湿地であったが、埋め立てて住宅を建てた場所。その住宅が津波でさらわれ、地盤沈下によって 70 年前の地形が蘇り、塩性湿地が戻ってきた。

国や県は復興事業として湿地は宅地に戻し、津波対策として最大 15m にも及ぶ巨大堤防を建設する方針を進めた。その中で巨大防潮堤を拒否し、湿地が保全され唯一の例外が舞根湾である。湿地の重要性を知る漁師の畠山氏らが 7～8 軒の地権者を説得し、土地を買い取ることによって湿地を残すことができた。

もう一つの記録に残すべき例は、気仙沼市の大谷地区である。ここでは、「どうしたら慣れ親しんだ砂浜を残せるか」として住民が議論をした結果、防潮堤を山側にずらし、その上に国道を走らせて砂浜を守った例もある。その対極のような例として、地元高校生が「砂浜を残してほしい」と懇願したが、長老に「そんなことをしたら今後国や県からお金が回って来なくなる」と恫喝され、宮城県最大の底辺 90m 高さ 14.8m の防潮堤をあげることができる。

2) 国の復興計画と住民の意思

災害復興に対する国の考え方は「直近のものに戻す」である。住民の意思を反映させるためには住民の意思を集約する必要があるが、そのためには平素からの交流とリーダーになる人が不可欠である。そして、国の具体策が出る前に住民の意見を具申することが大切である。

意見集約時に重要なことは賛成か反対かを問うことではなく「どうすれば可能か」という設定が大事である。賛成か反対かで議論すると世論が 2 分され住民の対立に発展し解決が困難になる。

3) 国のやり方に風穴を開けた

今年 9 月 21 日、舞根湾奥部の一部で 10m のコンクリートの護岸が掘削された。気仙沼市への要請から 8 年目のことである。元は土管 1 本で海につながる西舞根川と繋がっていたが、海水の流入をよくするために無用の護岸を撤去してほしいと要請し続け、却下され続けてきたがようやく実現した。「前例がないから」という役所が良く使う常識に風穴を開けた画期的な事例である。今回の市の変化には「海と共に生きる」を標榜する市側が湿地の価値を理解し始め、湿地を観光資源に使ったり、環境教育に使えと判断したためと思われる。我々としてはこの地域で生態系がどのように変わってきたかを検証し、「間」の役割を立証し自然との付き合い方（本来のエコツーリズム）のモデル地域に行きたい。この場所は森里海がコンパクトに繋がっており、魚やプランクトン、底生動物、海藻類、水性昆虫や鳥類がどのように湿地を利用しているか、その仕組みを解明するうえで貴重な拠点である。なお、気仙沼市と粘り強く話し合いをされてきた横山勝英先生（首都大学東京教授）には、12 月 14 日に経緯を紹介頂く予定である。

4) 海の回復は早い

2011 年 3 月の大震災によって舞根湾沿岸の海の生物は殆どいなくなったが、7 月になるとキヌバリやホヤ、それに魚食性のヒラメなど多様な生物が戻ってきて、生き物のたくましい生命力を再認識した。そのことを地元住民に報告すると、一気に元気になられた。

舞根湾に復活した湿地にはいち早くアサリが戻り、3cm ほどに成長するのに通常 3 年かかるものが 1 年余りで成長した。ウナギも戻ってきた。ところが防潮堤工事現場の作業員がそれを見つけ全部獲ってしまったという皮肉な後日談もある。

5) 舞根湾自然回復の実態調査を集約

2011 年 5 月 21 日、志のある研究者が舞根湾に自主的に集まって 津波から海の復興過程の調査を開始した。（翌日の 5 月 22 日に環境省主催のシンポジウムが開催されその場に当時皇太子（現天皇）が聴衆のお一人として来場され熱心にメモをとられていたお姿が印象に残っている）

調査は 2 か月に 1 回のペースで冬の寒い時期も欠かさず継続された。京都大学フィールド研の益田玲爾（右写真）先生はこれまで 52 回欠かさず舞鶴から駆け付け地道な活動を



されてきており、頭が下がる想いである。

舞根湾の調査は2021年3月で丸十年（通算60回）を経過するので、ひと区切りとして、調査結果を集約する予定である。加えて残した湿地がどのような役割を果たしているか、湿地を残さなかった区域、防潮堤を造った区域と創でない区域と比較調査する予定である。このことによって森里海連環の諸過程を解明し、そのシステムを科学的に明らかにしたい。調査結果は歴史の証言として世界に発信し後世に継承して行きたい。

6) 「幸せ」の原点はどこにあるか

2人の事例から考えたい。1人は60代半ばの漁師で5千万円もの借金を抱えながらも、写真(1)のとおりに活き活きとした明るい表情をしている。その背景には、この豊かな海（太平洋銀行）に支えられて息子も孫も一緒に暮らして行ける展望が持てたことにあるからではないか。

もう一人は漁村が壊滅した村で漁を再開した唯一の家族の女の子。漁が再開され漁業の仕事を楽しそうに手伝う5歳の女の子の何とも言えない明るい笑顔があった（写真2）。太平洋銀行の利息だけで家族が生活できる見通しが得られたことが2人のこの笑顔に象徴されているのではないか。

人間の幸せの原点を考える場合「家族とともに暮らす」がキーワードの1つであろう。フィリピンのルソン島で幸せに関するアンケートをとったところ、95%の住民が今は幸せと回答した。「家族と共に暮らしているから」がその主な理由であった。



写真1



写真2

4. 植樹祭の意義

気仙沼の漁師畠山さんが「森は海の恋人」運動として植樹祭を開始されたのが平成元年である。また大阪の津田産業（株）が淀川にウナギを復活させる植樹祭を始めて7年になる。森に住み宮崎県椎葉村で焼き畑農業を続ける椎葉勝さんは日向の漁師を招待して植樹祭を始めた。私も来年3月「森里海を結ぶ植樹祭」を諫早市の森（多良岳）で開催するよう準備を進めている。

海に暮らして森を想う。森に暮らして海を想う。そんな世界にするために、社会学や経済学など多様な分野の先生方および多様な市民の方々と連携してゆきたい。植樹祭はそのための1つの重要な道にもなる。

5. 来年の自然学講座について

私としては任期の5年間を通じ、この講座はスタッフを中心に大きな力（潜在力）を持っていることがわかったので、来年度からは講師との折衝も含めて企画そのものを講座生が中心的に進める体制に移行できればと考えている。そのプログラム委員会の座長は決まっている（今井氏）。また4年間の講演録を編集しそれに講座生の感想を加えた記録をまとめて本として発信してゆく。こちらの座長は阪本氏。私は講座全体をまとめる軸として引き続きお付き合いさせていただくが、講座生のレベルが上がってくればいつの間にか消えてしまっても何の問題も起こらないようになればと願っている。

<参考>

- ・「ニッポニアニッポン フクシマ狂詩曲」という面白い映画があるので鑑賞を勧める。監督の才谷遼さんは、柳川掘割にニホンウナギを復活させる運動や有明海を再生する運動のドキュメンタリー映

画を作製することにも尽力いただいている。

- ・尾本先生の著書本としては 山極寿一先生との共著「日本人と人類学」ちくま新書を推奨したい。
2月講演の参考にされたい



以上